

転生したら  
チートすぎて逆に怖い②

◆ ————— ◆  
至宝里清  
Risei Shiho

Regina  
BUNKO

MAIN CHARACTER  
登場人物紹介

リーベ・フリードリヒ &  
エルピス・フリードリヒ

フリードリヒ公爵家の双子。  
フィエルテを溺愛する光と影のような存在。

ネオス

王国の第二王子。  
光魔法の使い手。

ジュール  
・フリードリヒ

フリードリヒ公爵家三男。  
大人しいが、植物を育てる天才。

ディライト  
・プレザントリー

フィエルテの「運命の番」。  
少々自分に自信がない。

ルアアパル

フィエルテと契約したムーンソウルフ。  
普段は彼女の影に住んでいる。

フィエルテ  
・フリードリヒ

お詫びチートで、無限の魔力を持つ幼女。  
パワフルに異世界を満喫中！

## 目次

転生したらチートすぎて逆に怖い 2

番外編 フィエルテの社会科学見学

書き下ろし番外編

ジュール兄様のお熱日和

7

305

337

転生したらチートすぎて逆に怖い  
2

## プロローグ　フィエルテ・フリードリヒ

思い返すこと、五年と少々。

フィエルテ・フリードリヒ、六歳です！

四人の弟妹を持って働きづめの人生を送っている最中に、私は神様のミスというイレギュラーな死によってこの世界に生まれ落ちた。

そのお詫びとして神様からもらったのは「努力次第でなんにでもなれるチート」と「受け止めきれないほどの愛」。

そうして私はフリードリヒ公爵家の娘として生まれ、最強で最高の家族に出会った。そしてムーンウルフのルアアバルとも出会い、この世界で元気いっぱいに生きている。

さらに、この世界には魔法と精霊が存在する。

魔法は六つの属性に分かれていて、精霊は属性ごとに色が違う。炎の赤、水の青、風の緑、土の茶、光の金と闇の黒。掌サイズのカラフルな彼らは子供にトンボのような翹

が生えた姿をしている。どの子も小さな子供のようにどんなことにも興味津々で、やや飽きっぽい。人型をしているとはいえ人間じゃないから、感情のままに行動することが多くてたまに残酷だ。

その結果、村を滅ぼしたなんて歴史すら残っているけど、自分が好む相手のためには一生懸命行動するから根はすごくいい子たちだと言っている。

私には神様からのお詫びチートがあったせいで、精霊たちからよくちよつかいを出されていた。

ただ、精霊たちを自分の目で認識するためには、魔力鑑定というものをしなければならなかったから五歳までは謎の存在だったんだけどね。

そんな魔力鑑定式ではルナという友人までできて、とっても嬉しかった。

ルナはフォルトウナ商会という大商会の娘で、とっても目利きの女の子だ。

特にこの世界では砂糖でものごく甘くしたお菓子しか食べられないから、ルナのおうちが取り扱っているフルーツが私にとっての救世主だったよ……！

ルナのおうちは王家御用達の人気商会だから扱ってるフルーツもすごく美味しい。さっぱり食べられるフルーツって最高だよね……！！

そんな感じで、新しい私の人生はチートすぎて怖いぐらいだったんだけど、五歳児で

はやれることも限られていて、もどかしい思いをしたことも一度や二度ではない。それでも、これから成長していこうって決めて、このフリードリヒ公爵家のできることを探している。

神様から無限の魔力をもらったのはいいけれど、この世界では魔力を五歳になるまで感じ取れなかったし、魔法を使いこなせるようになるのはもっと後の話だった。

でも、「努力次第でなんにでもなれる」ってことはこれからだよーね！

そんな訳で、今はちよつと感情に引きずられやすく、熱を出しやすい体を改善中だ。体がもう少し丈夫になったら、いっぱい愛してくれている家族に何かお返しができるように、お金が稼げないかな、なんて思っているんだけど……

「フィル、考え事？」

「ん、ちよつと今までのことを思い出してた」

つん、と頬をつつかれて振り向くと、デイライト——デイーが私を見ていた。

狐と兎獣人の血を引く彼は、もふもふの狐耳を持っている。それがちよつと心配そうに動いているのを見て、私は彼にもたれかかった。

「この一年いろんなことがあったもんね」

デイーはそんな私を見て優しく微笑むと、ぽふぽふと頭を撫でてくれる。

彼は私の『運命の番』だ。

六歳なのに運命なんて……と思うけど、『誰かに強く愛されたい』という願いを神様が叶えてくれたのだ。

ひょんなことから出会った彼は複雑な事情を抱えていた。病気がちなシオン兄様と、獣人の血が混じるデイーを蔑む家族——それらの問題が解決した今は、実家であるブレザントリー家を立て直すために奔走している。

「デイーとシオン兄様はこれからまだ忙しい？」

「そうだね……これからしばらくはあんまり会えなくなっちゃうかもしれない」

その言葉と共に、デイーがぎゅつと私を抱きしめる。

デイーの可愛さに内心ときめきつつも、私はデイーを振り返った。

「でも、それが終わったらずっと一緒にいられるでしょ？」

「うん。そう思っただけよ」

私の言葉を聞いてデイーの尻尾がぽふぽふと揺れる。よかった、喜んでくれたみたい。ずっと忙しかったから今日ぐらいいはゆつくり……と思った時、突然バチッと大きな音がした。

窓の方からだ。その音と同時にデイーが私を窓から遠ざけるように抱き上げて、目を

凝らす。

「何か入ってきたみたい。『カラス』が追ってるのかな？ 少し木が揺れてる」

「侵入者？」

「おそろくね」

そう言って辺りを警戒する姿は、プロそのものだ。

じっとしていると、ピリッとした感覚が体を巡った。静電気かと思ったけどなかなか治まらない。

「っ、ピリピリするかも？」

「大丈夫!? ……ああ、相手の魔力に当てられたんだね、カラスが自分の魔力をルティに当てるようなへまをする訳がないし……少しだけ我慢できる？ 多分すぐ終わると思うから」

こくと頷いてディーにそっと寄り添う。

フリードリヒ公爵家はこの国の宰相であるお父様が当主で、この国で国王陛下に次いで力を持っていると言っても過言ではない。

だから敵も少なくはないのだ。

『カラス』と呼ばれているのは、我が家を守ってくれている国の暗部『オルニス』のこと。

『オルニス』はフリードリヒ公爵家が立ち上げた部隊だ。ちなみにディーもその一員だったりする。

彼らが追いかけているということはつまり、我が家に忍び込もうとした暗殺者か何かなんだらう。

息を詰めてしばらくじっとしていると、そのピリピリする感覚は遠のいていき、何事もなかったかのように部屋は静まり返った。

ディーも体の力を抜き、時計を見上げる。

それから「あ」と小さく声を漏らした。

「ルティ。そういえば、明日はリーベさんたちの学校の学園祭に行くんじゃないかな？ こんなに遅くまで起きていて大丈夫？」

今日もミルク色の髪がさらさらとしていて綺麗……と見惚れてから、私は目をぱちくり。

唐突に日常全開なことを言われたことからっていうのもあるけど……

「え!？」

「リーベさんがそうおっしゃっていたけど……」

「き、聞いてないよ!？」

私は慌てて、窓の外を見る。すっかり遅くなってしまっていて、窓の外は真っ暗だ。お母様とお父様はまだお仕事で帰ってきていないけど、確かにいつもならそろそろ家にいるはずの兄様たちも帰ってきていない。

も、もしかして学園祭の準備があるから!?

このまま寝ずに待っていたら怒られてしまいそうだ。きつとうっかりやなお母様やお兄様は私に伝えるのを忘れていたんだろう。

そうだとしたら、明日は早起きしなきゃじゃない!?

「――僕は念のためリーベさんたちにご連絡しておくから!」

そう言ってくれるデイーにお礼とおやすみを言って、慌てて私は自分の部屋に戻り、ベッドに飛び込んだ。自分の影に向かってルアアパルを呼ぶ。

デイーの家族であるブレザントリー家の事件があつてからというもの、デイーとシオン兄様は元の屋敷に戻り信頼できる使用人とそうでないものを分けたり、その不足を補うための人選を行ったりと忙しい。

だから今日は久しぶりにデイーとゆつくりできると思ったのに……!

「ル、ルア!」

『どうした?』





すると影から大きくてもふもふの白銀の狼がするりと顔を覗かせる。彼がルアアパル——通称ルアだ。片耳だけ黒く、瞳に浮かぶ三日月は大きさに似合わず可愛いチャームポイントだ。

「明日、私が起きてなかったら起こしてほしいの……!」

『頼まれよう』

「ありがとう!」

もっふりとした白くて綺麗な毛皮は毎日の手入れのおかげでとても綺麗だ。ルアは少し呆れた口調だったが、私がギュッと抱きしめるとその温かな体で私を包んでくれる。

うう……学園祭、楽しみだなあ……!

もしかしたら眠れないかもしれない、と思っていたけれど、ルアに優しく尻尾で体を撫でられているうちに私の意識は闇に溶けていった。



「ま、間に合った……!」

『おお、自分で起きて素晴らしいな、フィエルテ』

「ありがとう!」

翌日、私はなんとか起床することに成功した。

ルアも何度か他の部屋には届かない程度に吠えることで、私を起こそうとしてくれたらしい。

ただ、残念ながらディーは私の寝ている間にまたプレゼントリーの屋敷に戻ってしまったようで、無事の起床を祈るお手紙がそつと机に置かれていた。

寂しいけど、私とディーはお互いの心を『結んで』いるから、ぎゅっと手紙を胸に当てると、ディーが今も私のことを想ってくれていることが分かる。

「お土産いっぱい買ってこようね!」

『そうだな、ディライトも喜ぶだろう』

ルアはそう言って尻尾を一つ振った。

それから「早起きですね」とメイドのリリアに言われながら、大急ぎで準備をする。なんとか、我が家の前にお迎えの馬車が来る前に私は準備を終わらせることができたのだった。

足早に部屋を出ると、嬉しそうなお父様とお母様が私を待っていた。

「今日は楽しみですな」

「しっかり準備ができていて偉いわ。たくさん楽しみましょうね」  
 国のお仕事を一手に担うお父様とお母様は、無理やり今日のお休みをもぎ取ったらしい。

笑顔で私の手を握ってくれた。

……私に学園祭の連絡ができなかったのも、ぎりぎりまでお仕事をしていたせいだといふから仕方ない。私は大きく頷いて、馬車に乗り込んだ。

## 第一章 初めての学園祭

「うわあ……！」

目の前に広がる鮮やかな光景に目を奪われる。

そのワクワクを誰かに伝えたくて振り返ると、私のことを微笑ましそうに見つめるお父様とお母様がいた。

ちよつと恥ずかしくなつてもう一度周囲を見回す。

王宮みたいに大きくて広い建物全体が色とりどりの花やリボン、フラッグなどで彩ら

れている。それに魔法かな？ 空を見上げれば紙吹雪や花吹雪が舞っていた。

本当に夢のように素敵な光景だ。

さらに大きな門をくぐると、色々な露店が並んでいて目移りしてしまう。

「ふふ、すごいでしょう？」

「はい！ 全部キラキラしてて、たくさんの方がいてすごいです」

「フィル、はしゃぐ姿も可愛いですが危ないですよ。入学前に将来入る学園で転ぶなんて先生に見られたら恥ずかしいでしょう？」

「気を付けます！」

お父様からの忠告は聞こえているが、どうしても興奮が抑えられない。

王立学園プリムールの学園祭は年に一度の学園の一大イベントでも有名なそうだが、プロではない生徒が出すお店なのにそのどれもが学生とは思えないクオリティのものが多く、王都に住む多くの人たちが愛されている。

作成者がプロではないからこそ、安く販売されている魔道具は特に平民の人たちに大人気だ。

学生たちも自分たちが作った製品を買ってもらえるから、さらなる材料費の獲得や、将来のパトロンを見つけたことができるチャンスらしい。

でもやっぱり貴族が多く通う学園だから、警備上の問題もあって学園祭に参加できる人数は決まっている。この学園に通う生徒の家族と抽選で当選した人たちが学園祭に参加できるようなっていると言っていると兄様が言っていた。

もちろん私は今回、家族枠で参加している。うちは今三人のお兄様たちがこの学園に通ってるからね。

きらきらと輝く景色に目を奪われながらも、お母様を振り向く。

「お兄様たちのお店楽しみです！」

「ふふ、そうね。あの子たちは自由時間を揃えたと言っていたし、先にあの子たちのお店に行きましようか。その後あの子たちが休憩に入ったらみんなで他の場所を回りますよ」

「そうですね。私たちが参加できるイベントもあるようですし、それまでは学園の見学も兼ねてお父様が色々教えてあげますからね」

「ありがとうございます！ お父様！」

嬉しくなつてぎゅつと抱きつくと、お父様の顔がでれつと緩んだ。

そういうえば、最近お父様が私のスキンシップが減つたつて嘆いていたつて……

そんなことはないとは思うんだけど、ディーがいたらディーにくつつきたくなつてし

まうから、この頃はお父様にくつつく頻度が下がっていたかもしれない。

無意識にディーにばかり甘えていたかと思うと恥ずかしい。

ディーに八つ当たりして、お母様に怒られるお父様は可哀想だし。

今日はお父様とお母様と一緒にいっぱい楽しもうかな。

「まずはリーベとエルピスのところに行きましようか」

「はい！」

お父様とお母様と手を繋いで、双子の兄様——リーベ兄様とエル兄様のところへ向かう。

背の高い二人に挟まれるとたまに浮いているみたいになつてしまう。夫婦仲がいい二人は私の憧れだから、私としては二人が手を繋ぐところが見たかったんだけど……

そんなことを考えながら歩いていれば着いたみたいだ。

「フィルー！ 元気か？ 気持ち悪くなったりしてないか？」

「リーベ兄様！」

大きな声で私を呼びながらリーベ兄様が近づいてくる。今日もお父様と同じ銀の髪がとっても素敵で、綺麗なピアスが耳元で揺れていた。

どうやら私が魔力酔いを起こしているんじゃないかって心配をしているようだ。

今日は周囲に人も多いので、魔力酔いを止めるあの苦い薬を飲んできた。だから大丈夫ですよーと言って抱きつく。

するとリーベ兄様はギューッと抱きしめ返してくれた。そうしていればエル兄様がため息をつきながら、こちらに走り寄ってくる。

「リーベ、他の人もいるんだからあんまり大きい声で叫んじゃダメだよ」

「大丈夫だって。お前は固いんだよ、エル。みんなも結構はしゃいでるし」

「まったく……リーベはいつもそうなんだから」

お父様に似た銀髪のリーベ兄様と、同じ銀髪だけど、お母さんに似たピンクのグラデーシオンが入った髪を持つエル兄様。二人はとっても対照的な見た目と性格を持っている。いわば陰と陽、光と闇みたいな。

だからたまに喧嘩をしているんだけど……

ふむ。

トタトタとお兄様たちに近づく。それからぎゅっと二人の手を握って、上目遣いで顔を見上げる。

「二人とも、喧嘩は……だめ、です！」

「っ、なんて可愛いんでしょう!？」

ちよっとお父様はお静かにお願いしたい。

別に今の会話は喧嘩ってほどじゃないけど、せっかくの楽しい日だからずっと笑っててほしいじゃん。

だからお兄様たちが言い合う前に止めなきゃと思った次第だ。

普段は仲良しだけど、この頃は学園祭近所で忙しかったから二人ともビリビリしていたみたいで、時折家の中で魔力がぶつかり合っているような気配がしていた。元々正反対の性格の二人だからぶつかる時はすごく大きくぶつかったらうんだよね。

……家が所々壊されるレベルで。

びっくりするのでそれはやめてほしい。

我が家はみんな魔力量が多いから、感情が昂たかぶると周りに影響が出てしまう。だからこそ魔力操作をしつかり学んで、何かあった時の被害を最小限に抑えられるようにしているんだけど、やっぱり心の操作は簡単ではない。

どんなに魔力操作を完璧にしたって、人間は感情に影響されやすい。だからこそ魔力操作は基本だけど一番大切で一番難しいとお母様に教えてもらった。それでもしつかり感情を抑えられる両親は私の目標だ。

私はまだ魔力操作を習っていないけど、もうすぐ教えてもらえるようになる。

私もただでさえ泣きやすい体なので、魔力と一緒にコントロールできるようになったらしいんだけど……！

色々考えていると、エル兄様とリーベ兄様は私にじつと見られ続けてだんだん居心地が悪くなってきたらしく、あわあわと手を動かしている。

「ご、ごめんねフィル」

「……あー、わりい。せっかくの学園祭だしな！ 遊びに来たんדר？ ほら、これが俺たちのクラスの出し物だぞ！」

そう言って、二人は今度こそ息ぴったりで、チラシのようなものを私に見せた。

魔法がかかっているのか、チラシからはきらきらと燐光が散っていて、『挑戦者募集！文武揃えば攻略可能！』という言葉が紙の中でくると回っている。

「出し物は迷路。フィル一人だともかしいたら難しいかもしれないけど、父さんと母さんがいるし、絶対楽しませるよ」

「迷路……？」

あっち、と指さされた方を見ると入口から奥がまったく見えない、小さな建物があった。入口の看板に、確かに迷路と書いてある。『文武揃えば攻略可能！』って書いてあるということは頭の良さと力の強さが必要ってことかな？

まるで武勇に優れたリーベ兄様と優しくも聡明なエル兄様をそのまま表したような出し物だ。

「やってみる？」

エル兄様が私の頭を撫でながら聞いてくる。

そうしている間にも楽しそうだけど悔しそうな声を上げて、迷路の出口から人が出てくる。

きつと途中でクリアできずにリタイアしたんだろう。

うーん、面白そうだけど、兄様が言う通り、一人じゃ寂しいし難しそうだな。作成者であるお兄様たちはもちろん参加できないだろうし……お父様たちならついてきてくれるかな。

ぎゅつとお父様に抱きついてアピールしてみる。

「お父様。私、お父様と行きたいです……かっこいいところ見たいです！」

「フィル、お母様は？ お母様の方がきつとすぐ攻略できるわよ？」

「何言ってるんですかアイシャ。フィルは私と行きたいんですよ。お父様のかっこいいところが見たいんです！」

「あら、私だってフィルにかっこいいところを見せたいわ！」

あちゃー、どうやら言い方を間違えちゃったみたいです。

可愛く頬を膨らませるお母様と、なんだか身にまとっている魔力が私の魔力感知にが  
んがん引つかかってくるお父様。どちらも負けないというようにこっちを見てくる。

入口で言い合ってるから他の人の視線が気になってしまう。

ただでさえうちの家族は顔がよすぎて、二人でいても人が寄ってくるのに、今はジュ  
ル兄様以外の全員が揃っている。そもそも宰相であるお父様と、国王陛下の妹で国一番  
の魔術師であるお母様は注目されるのに……！ そんな二人が子供のように言い合っ  
てるから、さらに注目されまくりだよ。早く中に入らなきゃ！

「じゃ、じゃあ三人でもいい？」

祈るようにエル兄様とリーベ兄様を見上げると、二人は肩をすくめて微笑んだ。

「俺たちもだけど、父さんたちがフィルのエスコート役を譲る訳ないしな」

「この頃デイトライトに取られっぱなしだったから三人でいいと思うよ。……一瞬でクリ  
アされたらどうしようかな、とは思うけどね」

ほっとして今度はお父様とお母様を見上げる。

今度こそ二人は喧嘩をしなかった。

ぎゅっと二人の手に自分の手を乗せれば自然と握ってくれるから、リーベ兄様とエル

兄様に案内されて、私たちはそのまま建物の中に入っていく。

中は暗いけど、足元が見えないほどじゃない。夜道にある街灯みたいに、所々壁の辺  
りが光っている。

入る前にエル兄様に渡された出し物の説明と、リーベ兄様に渡された杖は腰にくくり  
つけて進む。

えっと？ 説明書きに目を落とし勉強したばかりの文字を読み解いていくと、どうや  
ら謎解きをして正しいルートを進みつつ、それぞれの部屋にいる門番を倒さないといけ  
ないようだ。

門番に挑む方法は様々で、途中リタイアもあるけれど、見事クリアすればこの学園祭  
で使うことができるクーポンがもらえると書いてある。

なるほど『文武揃えば攻略可能』だね。

一人だけで挑むんじゃなくて、グループで挑戦したら絆が深まるかもしれない。いい  
ゲームだ。さすがお兄様たち！

そう思っ歩き続けていると、分かれ道があった。パッと見、道に違いはなさそうだ  
けどどっちに進めばいいだろう？

二人を見上げると、「フィルの思うがままに進めばいい」という言葉が降ってきた。

責任重大すぎる……！」

「じゃあ、こっちに行きますー！」

迷った時は左に進めって、何かに書いてあった気がするので左へ進む。

すると周りの暗さが一段高まった。足元はぼんやりと光っているので転ぶ心配はないけど、さっきまである程度見えていたお父様とお母様の顔が見えづらい。

「フィル怖くないですか？」

「はい！ お父様とお母様がそばにいますので平気です！」

「それならよかった」

お父様がぎゅっと私の手を握ってくれて、ほっとする。

よし、さらに先に進もう！ と思った時だった。

目の前にきらきらとした光の渦が立ち上り、ふわりと人の姿に変わる。どうやら生徒がやっているのではなく、精霊か幻覚魔法のような感じだ。

「……あら、これが最初の問題かしら？」

お母様が足を止めると、門番らしきそれが微笑んだ。

『夜が笑う時。笑顔が咲き乱れる。我にその姿を見せよ』

柔らかな声でその問いが二度繰り返される。最初は頭脳を必要とするみたい。

この門番は問題を出す担当だから倒す必要はないのかな？ それにしても夜が笑うってどういうことだろう。笑った時に笑顔が咲き乱れるってそもそも矛盾している気がするし、もしかしてそのまま受け取ったらいけないのかな……

いくら考えても分からずお父様をチラッと見上げる。こういうのはお父様が得意だ。

お父様はもちろん剣や魔法も使えるけれど、どちらかと言うと戦略を練ったり、頭を使ったりすることの方が得意だと言っていた。

するとお父様はちょっとイタズラっぽい笑みで私に言った。

『「夜が笑う」ところをフィルも見ることがあると思うよ』

「えっ？」

ヒント!? 目を見開くと、お母様もあらあらと言って微笑んでいる。

こ、これは二人とも、もう答えが分かっているんじゃないや……

「そうねえ、フィルは夜じゃなくても近くで『笑う』のを二つ見ているかもしれないわ」

お母様が両手の人差し指を私の口の端に当てて、きゅっと持ち上げる。

私の口が自然と笑みの形になって……

「あっ」

思わず、目を瞬(瞬)かせる。夜にあって、私の近くにある『笑み』の形のもの。

「それってもしかして、三日月のことですか？」

「さすがフィル！」

夜に浮かんだ三日月は、日によって笑みの形に見える。それに私のそばにいるムーンウルフ、ルアアパルの瞳には三日月が浮かんでいる。

お母様たちはそうやって私にヒントを教えてくれていたんだ。パスを出されてのシュートだったとしても嬉しいものは嬉しい。

思わずその場で跳ねると、お父様に撫でられた。

「さて、その先は私が引き受けよう」

そうだった、この先の『笑顔が咲き乱れる』はまだ解けていないんだった。

でも月がいっぱいある訳じゃないし……

頭を悩ませていると、お父様は微笑んでお母様に向き直った。

「アイシャ、スーリールの花を」

「分かったわ」

スーリールの花？ 首を傾げていると、お母様が氷魔法でその場に美しい花を生み出した。ユリのような形をした真つ白な花で、三日月の模様が花びらの先に入っている。

「スーリールっていうのは三日月が出る夜にしか咲かない花のことだね。咲き乱れる、

という言葉がヒントだったのかな」

スーリールの花は、言葉通り一輪ではなく群生で咲き乱れるらしい。三日月を笑っている口元に見立てて、『笑顔が咲き乱れる』ってのがスーリールの花のこと。それを見せるってことは、スーリールの花をなんらかの形で見せればいいってことだったんだね。

お父様に教えてもらって、思わず拍手をしよう。

すると、門番は『正解!!』と大きな声で告げて消えていった。

第一関門突破だ。

「お父様すごいです！」

本当にお父様の知識量はすごい。この国の宰相をやっているのは伊達じゃない。宰相は王の一番近くにいて、国王が何かを間違えそうになった時に諫めることも仕事のうちだ。

だからこそ何がダメで何がいいのか、この国のために何が必要なのか、他国との情勢も考えつつ国で問題が起きた時まず一番最初に動かないといけない。

それを判断するために培われたのがこれらの知識なんだろう。

国のことを考えながら、家族のことも考えられるお父様って本当に尊敬できる。

普段の私に対してのデレデレが嘘みたいにな、こういう時は格好良く見えるんだよね。



そうやってお父様を褒めちぎりながら進んでいると、またいくつかの分岐に出会った。そのたびになんとなくこっちなかな？ という方向に曲がっていく。

やがて、また目の前が光り輝き、二人目の門番が現れた。

『周りのものを壊すことなく我の目を倒せ』と門番が口にする。

今度の門番は一人目と同じように光っていたけれど、出題を終えると同時に姿を変えた。

一見ただの円柱に見える。大理石か何かでできているようなとろりとした質感の白色の大きな柱……どうやら魔力操作が重要になる戦闘みたい。周りのものを壊さない繊細な魔力のコントロールと、この大きな柱を倒せるぐらい強い魔力を操作できるかどうか求められているようだ。

これはお母様の出番かな？

にこっと笑って、一歩前に出るお母様をじっと見つめる。

魔法の発動から攻撃まで見逃さないようにしっかりと。

お母様の魔法を使う姿は勉強になるってお兄様たちが言っていた。

こういう狭いところで使う魔法ってどんなのがあるのかな？

お母様が一人で円柱の前に立つと、こちらを振り返って微笑んだ。

「フィル、お母様の魔法よく見ててね」

「はいっ！」

ドキドキしていると、お母様のそばに精霊が現れた。同時にふわりと爽やかな風を感じた。

『アイシャ、久しぶりー！ それにフィルも』

この声は、お母様と契約している風の精霊のリーンだ！ リーンが呼ばれたってことは風魔法かな？ でも室内で風を起こすっていうのは……？

「さあ、リーン。力を貸して」

『なんだか楽しそうなことをしてる！ もちろんいいよお！』

お母様の言葉と共に、小さな竜巻が巻き起こる。

リーンが自分の掌に息をふきかけたことで、小さな風の渦ができていくようだ。リーンがお母様の前にそれを離すと、今度はお母様がその小さな風の渦に魔力を加える。

やがて小さかった竜巻は円柱と同じぐらいの大きさになった。

部屋の中で竜巻を起こせるのはすごいけど、そんなのを起こしたら周りの壁まで壊しちゃうんじゃない？

そう思い、一人焦ったけれど、実際は違った。

「あれ？」

竜巻が、円柱を少しずつ削って上から崩していく。けれどお母様の後ろに立つ私たちにはそよ風一つやってこない。ただ、お母様の風の魔力がそこに集中していることだけが分かって思わず見とれてしまった。

「すごいでしょう？ 部屋の中で竜巻を起こすという発想力。小さなものを作るための魔力の込め方。周りに影響を出さないようにするコントロール。あの人が私の妻であり、あなたたちの母親なんですよ」

お父様が、誇らしげに愛おしそうにお母様を見つめてる。

「はい……。すごく、すごく綺麗です。お母様すごい……」

そう言っていると、あつという間に門番である円柱が消えていく。

『お見事！』という声だけが最後に響き、ひとかけら残っていた円柱は跡形もなく消えた。当たり前だけど周りには何一つとして影響は出ていない。

ただ、門番すらいなかったのでは、と思えるほど静かな道が目の前に広がっている。それに対して、特に疲れた様子もないお母様。あのレベルの魔法を使えるなんてどれだけの努力をしたんだろう。才能だけで到達できるとは思えないくらいすごい魔法だった。

ただでさえ魔力量が多いと魔力量の調整や動かす時の操作が人の何倍も難しいはずなのに、それを簡単にやってのけるなんて。

本当に自慢のお母様だ。

早く、私も早く魔法を使えるようになりたい。お母様みたいなすごい魔法を使えるように。

「さすがですねアイシャ」

「ふふ、フィルのために張り切っちゃったわ。どうだったかしらフィル？」

「すごかったです！ やっぱりお母様は私の自慢のお母様です！」

「ふふ。ありがとう」

本当に、自慢のお母様だ。

私たちはまたゆっくりと歩を進めた。

私が選ぶ道の二択を間違えていたのか、何度か見たことのある道に出ることもあったけど、お父様とお母様はまったく怒ることなくもう一つの道に足を進めた。

それから何人かの門番に出くわした。

スフィックスのように謎を出す門番、可愛らしく見えてすごく足の速い兎型魔獣の捕獲、音楽で作られた謎解き——様々な難関を私たちは突破していく。

## 『お見事』

そうして、しわがれた声で言ったチェスの騎士のような七人目の門番が消えると同時に、パツと目の前が瞬いた。

わあっと歓声が聞こえる。

辺りを見回すと入口に戻ってきたようだ。外の明るさが目に染みて、何度も瞬きをする。すると首にはいつの間にか、小さなメダルのようなものが下がっていた。

「まさか攻略者が出るなんて……」

お兄様たちのクラスメイトらしき人たちがこちらを見てびっくりしている。

その一方で、お兄様たちが結果は分かっていたとでも言うような苦笑を浮かべて賞品を持ってきてくれる。

学園祭内で使えるクーボン券だ。

ちよつと悔しそうな顔で、リーベ兄様は頭を掻いている。

「あー、やっぱり父さんたちには簡単だったかー。結構企画する側の俺たちも趣向を凝らして、難易度も高めにしてたんだけどなー」

「フィルがいるのに格好悪いところは見せられませんかからね。しかし番人たち——幻覚魔法や、精霊魔法の使い方は見事でしたよ」

「うふふ、私も頑張っちゃったわ！ フィルも頑張ってくれたしね」

「うん！」

謎解きはヒントを出されてばかりだったけど、兎型魔獣を捕まえる時にはルアを召喚して、一緒に隅っこに兎を追いつ込んで、音楽をメモしたり、すごく楽しかった。

そう伝えると、お兄様たちはとても嬉しそうに笑ってくれた。

その光景と何かがダブって、目を擦る。

そうだ、前世でも似たようなことをしたんだ。確かあの子の文化祭もこんな感じだったつけ……

ふと、前世のことを思い出してしまった。

私には四人の弟妹がいて、一番上の弟が動物好きだった。

クイズをして、よく動物のことを教えてくれたつけ。

この世界で私は本当に優しく愛されている。でもあの子たちは私がいなくなって大丈夫かな……

そう思っていると、誰かに優しく頭を撫でられた。見上げればエル兄様がいた。

「大丈夫？」

「ん……ごめんなさい、大丈夫です！」

慌てて笑顔を作ると、エル兄様は一瞬目を見開いてから微笑んだ。

「フィルは時々、すごく遠くを見ているけど、何かを一人で抱え込む必要はないからね。僕や家族は絶対にフィルの味方だから」

「エル兄様……」

せっかく、学園祭で楽しそうだったのにごめんなさいの気持ちを込めて頭を下げると、大丈夫だよ、と言われてしまう。

それから私の頭をボンボンとひと撫でして、エル兄様はリーベ兄様のところに戻っていった。

「フィル？」

お母様に声をかけられて、慌てて手を繋ぎなおす。

「どうしましたか？」

「ううん、なんでもないです！」

元氣な声を出すと、お母様とお父様は一瞬首を傾げたけど微笑んでくれた。

まだ、私は家族に自分の前世のことを話していない。

話せないのは私の弱さだ。置いてきてしまったあの子たちが心配だけど、どうすることもできないし、今ここにいる家族のことよりも前世を優先しているような自分はあ

まりよくないんじゃないかって思う。

いつか話せる時がくるかな？ 話せたらいいのにな。

「エル兄様、ありがとう！」

今はせめて、そっとしておいてくれることにお礼を言うべく、私は大きく兄様に手を振った。

それからお兄様たちはクラスの人たちに色々引き継ぎをして、私たちと合流してくれた。

次に向かうのはジュール兄様のところだ。ジュール兄様はどんなことをしてるのかな？

学園を飾っている外装の植物を動かしているのはジュール兄様だと前に聞いたけど、部活の方でも何か出し物を出しているらしい。

きつとジュール兄様の好きな植物関係の何かだと思うんだけど。

お花を売ったりとか？ それともお花の育てかた講座とかかな？ 私も植物は好きだしジュール兄様のお話はすごく面白いから楽しみたい。

あ、でもジュール兄様、家族以外とお話するのは苦手だっけ。大丈夫かな？

心配しながら今度は、お兄様たちと手を繋いで歩く。  
 本当は私のことをエル兄様が抱っこしたそうだったけど……それだと誰か一人しかできないからダメなんだって。

また喧嘩が始まりそうになったので、妥協案として二人と手を繋ぐことになった。父様たちのラブラブ手繋ぎも見れて嬉しい。

背の高い二人と手を繋ぐと正直腕が疲れるから、帰りはエル兄様に抱っこしてもらいたい。

甘えたことを考えつつ、眩しいほどの景色を見てみると、ふと視線を感じた。

「ん？」

視線を感じた方を向くと、誰かとガッツリ目が合ってしまう。

そこにいたのは見たことのない緑髪の男性だった。なぜか私を見て目をきらきらと……もとい、ギラギラさせている。

えと、どちら様？

そう聞こうとした時だった。

「妖精？」

「え？」

「あなたは妖精ですか？ なんの妖精ですか？ あ！ その可愛い見えた目はスイー  
 トピーの妖精ですね！ ああ！ なんて可愛いんでしょう！」

ぼそりとした呟きの後、ビックリするような速さでその人は私との距離を詰めてくる。

何この人！ 怖いんだけど！

「っ、おにいさま！」

本能的な恐怖に襲われて、エル兄様にしがみつく。

するとエル兄様が私をぎゅっと抱き抱え、リーベ兄様が私たちを隠すように立ってくれる。

お父様とお母様も眉をひそめて、私とエル兄様を囲むように立ってくれた。

「ああ！ 隠れないでください！ 大丈夫ですよ。少しお話がしたいだけですから」

「いやです！」

リーベ兄様の身長で前に立たれたら結構怖いはずなのに、彼は今も私を見ようとしているのか、私たちの周りをクルクルと回っている。

何この人！ 人を妖精だとか言つて！ 違うから！ れっきとした人間だから！

というか、さっきからうちの家族から向けられている殺気にこの人は気づいていないんだろうか。私が本気で泣きだしたらどうなってしまうか分からなくなるから泣くに泣けない。

でも私の近くから離れてほしい。

もうやだ、ジュール兄様と合流したらここから逃げてやるんだから！

そう思った時だった。

「……プラント、ぼくの妹、泣かした？」

「ジュール兄様！」

「ジュール君！」

少年の後ろから現れたのはジュール兄様だった。

少年と私の声が重なる。

どうやら彼は、ジュール兄様の知り合いでプラント、というらしい。

ジュール兄様は彼——プラントさんが私を泣かそうとしたことに怒ってくれているように、表情が硬い。

しかし、プラントさんは一切それに気が付いていないようで、にこにこ笑いながらジュール兄様に向かって言った。

「いいところに来ましたね！ 見てください！ 妖精さんが来てくれたんです！ すごく可愛いでしょう。僕はスイートピーの妖精さんかなって思うんだけど君はどう思いますか？」

ス、スイートピーの妖精……？

「……フィルは、ぼくの妹」

「え？」

ジュール兄様が、プラントさんとリーベ兄様の間に入り、エル兄様に抱っこされている私の手を握る。

「この子……ぼくの妹。フィエルテ。妖精みたいに可愛いけど……ちゃんと人間」

「なんと！ こんなにも可愛いのに！ 同じ人間とはとても思えませんよ！」

私が人間だと納得できないのか、彼はさらに近づいてきてじっと見つめてくる。

興味のあるものを理解しようとしているのは分かるけど、まるで珍しい動物を見ているような視線が怖くて、体が強張ってしまう。

「っ……」

「プラント、それ以上近づいたら怒る……。フィル、怖がつてる」

また生理的な涙が溢れそうになって、ぐっところえたけど遅かった。

「うう、やだあ……」

エル兄様の腕に抱きつくようにして泣いてしまった。

基本家から出られない私は、見ず知らずの人にこんなにグイグイこられたことがなく

て純粹に怖い。ぎゅうっとしがみついてイヤイヤと首を振ると、三人のお兄様たちは心配そうに私の頭やら手やらを撫でたり握ったりしてくる。

同時にお兄様たちとお母様たちの殺気がプラントさんに向く。

けれどやっぱり彼がそれに気が付いたそぶりはなかった。

それどころかまさか私が泣くとは思っていなかったのか、彼はトンボのような眼鏡をかちやかちやと揺すってから、慌てたように両手を振った。

「ああ！ 泣かないでくださいっ！ すみませんでした……本当に妖精みたいにごく可愛かったから、僕の植物大好きな気持ち伝わって、ついに妖精が目の前に現れてくれたのかと思ったのです。ジュール君の妹さんだとは知らず……すみません」

早口に謝るその姿には特に私への悪意は見受けられない。

それが分かったのか、お兄様たちからも少しずつ警戒の色が薄れる。

ジュール兄様も、プラントさんのことは十分すぎるぐらいよく知っているんだろう。

困ったような表情を浮かべて私を見た。

「フィル……プラントも、悪気はないから。許してくれる？」

それにこくと頷き返す。怖かったけど、何か無理強いされた訳じゃないし、終始妖精さんって外見を褒められただけだ。

……ただ勢いがとんでもなかっただけで。

それに、植物の妖精に会えたって喜ぶくらい植物が好きなんだろうし、本当に悪い人じゃないんだろう。

そつとエル兄様に下ろしてもらって、プラントさんの前に立つ。

「フィエルテ・フリードリヒです。は、はじめまして！」

カーテシーをしてから顔を上げる。

すると、申し訳なさそうな顔をしながらプラントさんは自己紹介をしてくれた。

「僕の名前はプラント・ステイル。ジュール君の三つ上の学年で、同じ部活動を行っています」

「ステイル、さん？」

「プラントでいいですよ。ジュール君もそう呼んでいますしね」

ちらつとジュール兄様を見ると、うんうんと頷かれたのでプラントさんと呼ばせてもらおう。

とはいえ、年上の先輩にため口のジュール兄様、それはいいのかな？

しかしステイルってステイル伯爵家だろうか？ それなら植物好きも納得だ。

ジュール兄様がよく出かける植物の大会は、ステイル伯爵家主催のことが多い。

それはステイル伯爵家が植物を生業にする家だからだ。

ステイル伯爵家は領内の農産業に力を入れたことで発展した家で、この国に出回っている野菜や果物はステイル伯爵家領のものが多く、植物を使った商品や薬品もステイル伯爵家が何かしらの形で関わっていることが多い。

私がフォルトウナ商会でいつも買う果物もステイル領産のものがほとんどだ。

そんな訳で、ステイル伯爵家は爵位がものすごく高い訳ではないけど、この国でも結構重要な位置にある。

まあ一族が植物にしか興味がなく、研究者気質で社交界にも滅多に出てこないから、産業面では重要とはいえ、家名としてはそこまで重要視していない貴族が多いらしいけどね。

私はブランドさんを見上げる。

緑色の髪の毛に、大きな眼鏡。

私が勉強をした貴族年鑑にはまだ彼の絵姿や詳細は記録されていなかった。つまり、彼はまだ成人していないのだ。

「フルーツ……」

「フルーツ？ ……好きなんですか？」

私が呟くと、ブランドさんはすぐに私と視線を合わせるようにしゃがんでくれた。

やっぱりいい人だ。

私は大きく頷いて続けた。

「フォルトウナ商会さんから毎日届く果物は、ステイル領からのものだよってお父様が言っていました」

「ああ、確かにうちからフォルトウナ商会に卸していますね。なんでもこの頃はとても鼻屑にしてくださいさるお客様がいらつしゃるとかで……ウチとしても美味しく食べていただけるのは嬉しいですから、中でも状態や品質が最も優れたものをお渡しするようお願いしていますが……もしかして、あなたが？」

「いつも美味しいフルーツをありがとうございます」

砂糖漬けの甘味が好まれるこの世界で、フルーツを好む子供は珍しいとよく言われる。だからきつと、これは私のことだろう。

ぺこりと頭を下げる。

するとブランドさんは眼鏡の奥の目を丸くして、ジュール兄様を振り返った。

「……まさか我が家からフリードリヒ公爵家に卸していたとは知りませんでした。ジュール君。君は知ってたんじゃないやありませんか？」



それにジュール兄様はあいまいに微笑んで、返事をしなかった。  
あ、この反応は知ってた感じですね。

最近だと、ステイル領で果物を研究している人からと言って、フォルトウナ商会さんが持つてきてくれるおまけが確かに増えている。

それにすごくいい出来の果物とかをうちに優先的に持つてきてもらっていたし、ジュール兄様のお知り合いならもっと早くお礼を言えたのに。

それに美味しいフルーツを作る人って分かってたら怖い人とは思わなかったよ。多分。多分ね、うーん、でもさっきの勢いはやっぱり少し怖いかも？

どっちなあ、と思いつつジュール兄様を見上げると、ジュール兄様はプラントさんからそつと私を隠すようにして呟いた。

「……うちのフィルと会わせなくなかった」

「どうしてですか!？」

「フィルは……可愛いし……植物のこともバカにしない……プラントも絶対、好きになる。それで……フィルがほくよりプラントを優先するようになったら……やだ」

お兄様……

相変わらずのシスコンが炸裂しちゃってます。

そもそも誰も彼もが私を好きになったりするはずがない。

確かに見た目は優秀な遺伝子のおかげでそれなりにいい自覚はあるけど、人は見かけじゃないからね！

でもそれより、私がジュール兄様より他の人を優先するはずがない。植物のことだって、確かにプラントさんの家は研究で有名だけれど、家でも学校でも植物に対して熱心なジュール兄様はそれに負けないと思ってる。教え方だって上手で、難しい話でも私に分かりやすいように話してくれるから興味をそそられる。毒にも薬にもなる植物を、正しく育て、正しく使う兄様は尊敬できる人だ。

私の家族は尊敬できる人しかない。自慢の家族だし、他の人なんかに目を向けている暇なんてない。

………だいたい話がそれちゃってるな。

チラッとお父様とお母様の方に視線を向けると、あらあらと言った様子でジュール兄様を微笑ましそうに見つめていた。他の兄様たちも肩をすくめている。

「僕は自他共に認める植物バカだからそんな心配は必要ないと思いますけどね……」

「あはは……」

私が苦笑していると、プラントさんも苦笑しつつ頬を掻いていた。それから、私に向

かつて手を差し出す。

「さて、怖がらせたお詫びがてら、僕とジュール君の部活の紹介をさせてもらってもいいでしょうか？」

「はい、ありがとうございます！ ジュール兄様も、案内してくれますか？」

「……うん」

私が大きく頷くと、ジュール兄様とプラントさんは微笑んで後ろを手で示した。

今までは目に入っていなかったけれど、そこにあつたのは大きな温室だった。

ガラスがきらきらと日光を反射していて、眩しいくらいだ。

ジュール兄様に手を繋いでほしいと言うと、ちよっぴり驚いたような表情になつてから、そつと手を繋いでくれる。

うん、やつぱり兄様の手が一番！

中へ入ると、ふわっと暖かい風が室内から吹いた。

ジュール兄様が所属しているのは植物研究部だそうだ。

植物園の一角を借りて植物の育成方法や交配により新しい性能ができるのか、より良い品質のものができるのかを調べる部活らしい。今回の学園祭では、魔法と植物を組み合わせたちよつとしたショーみたいなのを行ってるんだって。

温室の奥に進むと、室内には学者っぽい人から一般人らしき人たち、私と同じくらいの歳の子たちまでがたくさん集まっていた。

「わあ……！」

よく見ると、その人たちが魔法を使うことで周囲の植物が成長したり、光ったりキラキラしててすごく綺麗だ。

その中で私の目に引くかかるものがあつた。一本だけ、みんなの魔法からも外れてしまっているようで、白い幹がくったりとしている。

あの苗木は……？

「ジュール兄様。あの苗木の元気がないみたいです」

「ん。……あれは、名前が、分からない木なんだ。図鑑にも載ってなかった。あの苗木が魔力を吸って大きくなるのは分かったけど……。でもぼくの魔力に少し反応するだけで……あんまり大きくならない」

なるほど。

他の人は魔法をかけてみたけど、木が反応しないのを見て離れていったのかもしれない。

ジュール兄様の魔法に反応するってことは、ジュール兄様と家族の私にも反応するか